「現代陶芸の精鋭 ～21世紀を開くやきものの手法とかたち～」に招待出品して

齋藤 敏寿

2001年4月28日から6月17日迄、茨城県陶芸美術館による企画展「現代陶芸の精鋭—21世紀を開くやきものの手法とかたち—」(主催　茨城県陶芸美術館、NHK水戸放送局)に出品した。

茨城県屈指の窯業地である笠間の地に陶芸の真髄を体現する交流の場として建てられたこの美術館は、この年、開館二年目を迎え、新世紀のスタートとして、1930年代から1960年代生まれの作家20名の新作近作、計48点による展覧会を企画した。

20世紀、「芸術」の国際的な動向とともに、日本の陶芸もまた、陶磁でしか成しえない表現を模索し再構築する作品が生まれた。それは「用」において、他者(使い手又は鑑賞者)との関係性からだけではなく、土が陶磁に至る過程からの視点、様々な、成形技法に根ざした芸術表現であり、単に用を廃した純粋芸術への迎合ではなく、伝統とともに土(陶磁)の未知への方向性と可能性とを指し示す、陶芸独自の多様化した進化であった。

一方で、現代美術の模倣や、伝統への回帰のみに立脚した陶磁作品が、無自覚に生まれ、陶芸は美術より一段低いもの又は、陶芸＝「用＋美」という固定概念が浸透した。しかし20世紀後半、それらの事態を反省、再検証し、陶芸の本質を見定め「制作する作家」「評論」「メディア」が一帯となり活動する動きが起こった。

その顕在となった本展覧会は、21世紀の始まりとして、世界的にも類をみない日本陶芸の奥深さの一断面であり、真に自立する造形としての陶磁作品を紹介し、国際的にも日本が発信することのできる重要な日本的価値観と成りえた。

展覧会場は、展示室のみにとどまらず、テラス、オープンギャラリー、パティオ、美術館へのアプローチ、野外展示スペース等も使い、従来からある陶芸作品展示の枠を超えて、陶芸の現在地を意欲的に紹介する展覧会であった。

archetype 00021　陶／鉄　w410 × d210 × h302cm